



0歳からの教育

楽で楽しい子育てのために

第十話

「伸びる子に育てる」子育て ⑤

モンテッソーリ教育を受けた人は何故社会で活躍できるのか？

モンテッソーリ法教育の特徴

モンテッソーリ教育について論評することは、多くの尊敬する先生方からのそしりを受けそうでこわごとしかできませんが、長年幼児教室を運営してきたものとして、多くの幼児教育法を比較検討した結果として思ってきたことがあります。

教え込むことでなく、人が本来持っている成長しようとする力を引き出す

1. 医者であり、科学者であったモンテッソーリ女史は次のように考えました。
ヒトは（他の生物と同様に）、DNA によって、自らの内に自分を成長させる力を持っている。その力がなければ、世代を超えて遺伝子を引き継ぎ伝えることはできません。子育て・教育においては、その潜在する力を引き出してあげることが大切です。
伝統的な教育は「教え込む」ことが主体でした。今でもその影響は強く残っています。
ジャン=ジャック・ルソーや福澤諭吉の育った時代では、子どもの学びは大人の読む経典の暗誦とか、儒学の教本の素読等が主流でした。福澤は幼少期のこのような学びは意味がないと言ったのです。（福翁自伝「獣身をなし....」）
2. DNA が発火するためには、しかるべき環境が必要です。それは、進化の過程で普通に用意されている環境（Evolutionary Expected Environment E.E.E. 進化的に、予定されている、環境）です。例えば、自然とか、人と人の関わりとか、日常生活の中で身体を使って色々なことに関わる体験（自分の身の周り、周囲のお世話、お手伝い、家畜やペットの世話等、子どもが関わって、目的を持った随意筋運動ができる）といった、ごく普通の環境です。

ところがどうでしょう、その進化の過程で当然にあった環境（E.E.E.）が現代では急速に失われているのです。人と人の関わりにしても、少子化、核家族化などで、非常に希薄化しました。現代ほど子育て環境が悪い時代はありません。その中で、親は工夫して環境を整備しなくてはなりません。

3. 親や保育者も大切な人的環境です。子どもが E.E.E. としての環境に関わることができるように援助します。これは、親が子どもの代わりにやってあげることはありません。自分の力で出来る様に支えてあげるのです。自分で行動して初めて子どもは学ぶのです。

支えてあげるテクノロジーの一つに「提示」というものがあります。動作の手順が子どもに分かり易いように、一連の流れを要素ごとに区切って、通常の1/6から1/8程度の速さで、ゆっくり「やって見せる」のです。ゆっくりと動きを分解して分析的に示すことにより、子どもはその動作を頭の中に分析しながら行うことができ、自分でやるときに、ワーキングメモリーの中に呼びもどして、プログラミングして、行動できるのです。これは思考の一形態です。ミラーニューロンが人の行動を自分の中に取り込む助けをします。この一連の動作は、視覚から、運動連合野、前頭連合野、その中のワーキングメモリー等の一連の脳システムを使うことであり、脳システム全体を実際の中で子どもの意思で使うことが「真の脳トレ」なのです。

ICE 幼児教室では、箸の持ち方、傘のたたみ方、雑巾のしぼり方、結び方等の（受験でも見られる）動作を、どの様に提示するか解説図示した教本を用意しています。

敏感期の発見と活用

4. モンテッソーリ教育法の大きな特徴の一つは、「敏感期」活用です。およそ生物の発育には、自分を成長させてくれるものに対して敏感な時期があります。それは、発達とともに移ろい、消えてしまうものですが、その時期を逃してしまうと、その機能の発育に大きな後れを取ってしまいます。機能が失われることもあります。敏感期に相当する現象は、脳科学などでは、臨界期、感受性期、発達課題などの用語が使われています。

モンテッソーリは六つの敏感期を上げ、この時期の敏感期に合った幼児教育の重要性を指摘しました。

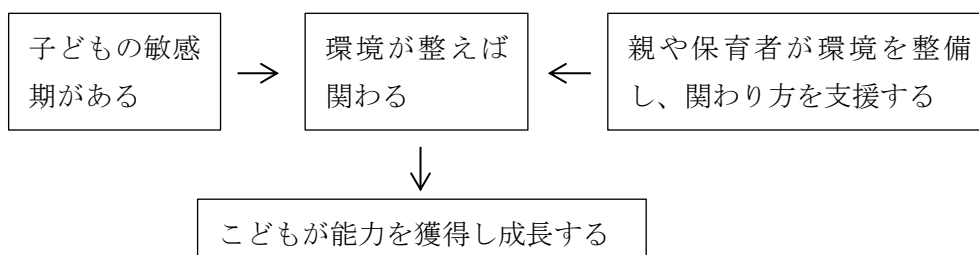
- ① 秩序への敏感期
- ② 細部に対する敏感期
- ③ 手の使用に関する敏感期
- ④ 歩くことの敏感期
- ⑤ 感覚の敏感期

⑥ 言語の敏感期

敏感期を理解することは、子育てを上手にするためには不可欠です。

敏感期のある能力を獲得するために、進化の過程で獲得した、成長システムの大事な要素です。

能力獲得の整理



敏感期のことを書きますと限りがありませんので、詳しくは、別の機会に譲りたいと思います。いくつかの私見を述べます。

- * 敏感期の発見と活用は素晴らしい偉業です。敏感期と言えるものは受精したときから様々な局面で現れます。受精後、急速に細胞分裂を繰り返し発育していくさまは驚異的で、そのそれぞれの局面に感受性期と言えるものがあります。モンテッソーリの発見した敏感期の概念の対象を広げることが現代的と思えます。
- * 0才～3才までの経験が人格形成、能力形成に大きく関わっています。人や社会に対する肯定感、自分にたいする肯定感などに対し、決定的な影響を与える敏感期ともいえます。この時期に親（またはそれに代替できる人）の愛を通して、人間や社会、生まれてきた世界に対する信頼感・肯定感を得ることができるかが決め手です。求めれば母乳が貰えることから始まり、自分の身体が次第に自分の思う様に動かせる、人とコミュニケーションできることで生じる、人に対する信頼感、自己有能観・肯定感、これらは世界観となって、生涯を通してその人に人格を形成し、生き方を変えます。昔から「三つ子の魂、百まで」と言われています。
- * 0才～3才の母（又は他の保育者、祖母等）と子の「基本的信頼関係」の構築は、この時期の発達課題であり、失敗すると人格形成・能力形成に悪影響を与え、青年期に顕在化します。（第三話 エリクソンを参照）この時期は、一種の敏感期ともいえる感受性が子どもにはあります。

- * 児童精神科医ジョン・ボウルビーが 1968 年に愛着理論を発表してから、「愛着」の研究が進められてきました。最近は「愛着障害と脳」の関係が注目されています。先日筆者が勉強会で見た映像で、身体的にも知育的にも未熟で愛着障害と診断された韓国の幼児が病院に入院してから、脳機能及び身体的発達の正常化が見られたというレポートがありました。良好でない「愛着形成」は周囲に多くみられる現象ですが、安定した良好な愛着を築くことの本質はそれほど難しくありません。ドナルド・ウィニコットの提唱する「ほどよい母親」の概念がそれを表しています。「ほどよい母親とは、どこにでもありそうな、愛情と優しさを注ぎ、子と一緒に過ごす時間を楽しむ母親のことです。」つまり、0才～2才または3才までは、無償の愛を注ぎ、かつ、いやいや子育てをするのではなく、子育てを楽しみ、スキンシップをすることです。赤ちゃんはお母さんも楽しんでいるのか、いやいや子育てをしているのかを見抜きます。その子育て態度が、人格形成、能力形成の土台となるのです。愛着についても別の機会により詳しく述べます。

- * ヒトは胎児及び0才の時から外界の情報を取り入れ、発達の準備をしています。モンテッソーリ法教育の凄さは、ヒトが未成熟ながらも外界の情報を捉え、何らかの反応をすること自体が、発達の連鎖の始まりととらえ、やがて、自己の意図において、目的を持った随意筋運動を行うことにより、脳システムを稼働し、脳システムを成育させ、前頭連合野を発達させるという、天から授かった、または、長い生物の進化から授かった発達のプロセスを機能させようとしていることです。

- * モンテッソーリ法教育が勧める新生児の環境は、動きの自由の与えられた環境です。「新生児に話を戻します。(中略)当初はほんのわずかしき動くことはできませんが、潜在する運動能力を正しく認識して、始めから手助けされなくてははいけません。(中略)彼らは衣服から解放されて、動く自由が与えられ、まわりを眺めることができる状態に置かれると、すぐに泣き止みます。からだを動かせることがあまりに嬉しくて、しばらくは食べることをすら忘れてしまうほどです。(中略)移動するときに、からだと心が一緒に機能していると言う、両者の関係を見て取ることができます。」
(『いのちのひみつ』シルバーナ Q.モンタナーロ著 中央出版)
写真が掲載されていますが、広いスペースに置かれた大きな白い敷物の上に、上半身裸で横たわる嬉しそうな新生児が写されています。手足指

等を自由に動かし周囲を探索するうちに、心と身体の統合感が生まれ、「自分は色々なことができるのだ」、という、能力観、自分に対する肯定感が育ちます。乳を求めて泣き、それが満たされる時も、「自分の（泣くという）努力が叶えられたと感じ、自分の力や、生まれてきた世界に対する肯定感が生じます。自分の周囲を自分で探索すること自体が、新生児のときから脳システムを活性化し、発育を促進し、やがて前頭連合野を発育させるのです。

先日乳児をかかえた二人の母親が話し合う場面に居合わせました。一方の母親は常に赤ちゃんをあやしたり、赤ちゃんには言葉が通じないのに話しかけ微笑んでいました。もう一方の母親は赤ちゃんが泣いても知らん顔です。「ギャン鳴きしてる」等と平然としています。しかし、このちょっとした養育態度の差が、将来大きな差になってくることはあるのです。赤ちゃんは、母親の言葉を内部で無意識の内に蓄積して、あるいは、口の動きに合わせて自分の口を動かそうとし、来るべき言語爆発に備えているのです。「自分の（泣いて訴えている）要求に応えてくれる」ということで、人に対する信頼観、自分にたいする有能観、世界に対する肯定感を育むことができるのです。この時期の外界をすべて丸ごと吸収する能力とともに、自分の世界観を作り上げているという意味では、一つの重要な敏感期の中にいると言えます。

- * 乳幼児が外界の情報を取り入れ、それなりに分析し、外界を知り、反応すると言う意味において、モンテッソーリが「感覚の敏感期」を発見し、教具を開発したことは素晴らしいことです。しかし、五感が大切なことは、胎児の時からで、胎児の時に母様が歌ったりすることも、振動として子どもに響き、発達を促すことを発見した学者もいます。
- * 感覚の活動が知的発達に先行し、感覚の活動が知的発達を促していきます。モンテッソーリの感覚教具も 3 歳以前の子どもの感覚能力の成長を基盤にしています。感覚の洗練は前頭連合野の発達に先立つものです。
- * 具体物のイメージや概念、すなわち意味は、直接触れ、操作することによって形成されます。「モンテッソーリ法の日常生活の練習や感覚教育の活動は、身の回りにある事物や現象に子どもが直接にかかわり、体験することを通して、その意味を感覚運動的なものとして獲得していくものです。」
（『世界一の子ども教育モンテッソーリ』永江誠司著 講談社新書
注 モンテッソーリ法を脳科学の視点から読み解いた初めての著書 ）

上記の通り、感覚の敏感期は早い段階から始まり、感覚は乳幼児が外界と
かかわるために大切なものと言えます。乳幼児は体性感覚を通して外界と
つながり、目的のある随意筋運動を通して、思考の原型を形成していきま
す。

敏感期または感受性期というものは、発達のいかなる局面にも大なり小
なり見受けられます。0歳～2歳までは、子どもに対して、無償の愛情を
持って、感性を持って、すぐ反応してあげて、一貫性を持っていれば、
大方良好な子育てと言えます。

以上

ICE幼児教室のホームページはこちら